

巻頭言 変化と予測

私が大学院生のころ、研究室に初めてパソコンが導入された。使用言語は BASIC である。そこでパソコンを使うために BASIC の勉強を始めたが、まだ十分慣れないうちに、主流の言語が FORTRAN に変わった。私は早くもここでリタイアしたが、院生の中で要領の良い者はこれを使いこなし、さらに機械語、C 言語と進んで行った。私はあれよ、あれよという感じで見えていたが、そのうち Windows が出てきて全部いらなくなった。ソフトも豊富になって、日本語で指示通りに進めば、統計の計算もグラフの作図もできる。自分で言語を使ってプログラムを組む必要はなくなったのである。私の場合は BASIC だけだったが、それでもあの努力は何だったのだろうかという空しさが残った。MS-DOS というのもあった。当時は MS-DOS の命令を知らないとパソコンが使えなかったのだが、今やこれも死語に近い。

学会の発表形式も時代と共に変わってきた。私はさすがに知らないが、昔は模造紙にマジックインキで書いて講演したそうだ。ある研究室では院生が教授のために発表用のシートを作るのだが、しばしば当日の朝になって「考えが変わった」と御託宣が下り、一同パニックになって作り直す。そういう「こまったちゃん教授」もいたらしい。それがスライドに変わり、私が発表し始めたころはブルースライド全盛。これがいつまでも続くと思っていたが、やがて OHP が登場する。私は初めのうち無視していたが、次第にこちらが主流になり、写真屋にスライド作りを頼む手間もいらないので乗りかえることにした。そこで OHP フィルムをたっぷり買い込んだのだが、この頃がこの方式の末期だったとは知る由もない。フィルムは大量に余って、今でも私の手元にある。続いて出てきたのが、現在のパワーポイント・プロジェクタ方式である。コンピュータ言語と OHP で痛い目に遭っていた私は、これをパスすることにした。どうせまた次に何か出てくるだろうから、その時にそれをやればよい。1 段階スキップして手間を省こうと目論んだのである。年もとってきたし、新しいものに習熟するにも時間がかかる。また、研究室にいた頃のように、大勢でわいわいやっていたら、見よう見まねで覚えるのはたやすいが、一人でやっていると、つまらないことに引っかかって何十分もロスしたりする。しかし最近の学会では、スライドはおろか OHP もなるべくやめてくれという雰囲気になってきた。やはりパワーポイントをやるしかないか、とあきらめムードである。何年たったら何に変るという予測ができればよいのだが、そうはいかないからやっかいだ。スライド全盛時代に、今のパワーポイント方式を予測した人はいない。そもそもパソコンというものがなかったのである。しかしこれも、いつか必ず別のものに変る。ただしいつ、何に変るかは誰にもわからない。

この予測という点では、一般的にいつて予測は不可能、という主張がある。たとえばポパーは、経済の予測について次のように言う。もしも将来のある時点で株価が下がるという予測ができたとする、株主はそれより前に売り抜けようとするから、予測した時点以前に株価は下がる。つまり予測はずれるのである。予測したことその

ものが状況を変えるから、正確な予測はありえない。してみると政府の経済予測なるものは、いかに大量の情報をインプットしようと、本質は政治的プロパガンダにすぎないと言えるかもしれない。この問題は哲学の言葉で、帰納と外挿の限界、と表現することもできる。予測とは、過去と現在から帰納したことを、外挿して未来に適用することである。しかし過去、現在と未来が同一母集団に属するという保証はない。限られた情報から、一般的な結論を導くことはできないのである。

科学研究の分野では、いわゆる「つまらない総括とありふれた予測」というのがある。「今までの二つとも極論だから、中間的に妥当な方針で進めなければならない。」「観察と実験が分離しているから、今後は両者が統合されるだろう。」「方法がまちまちだから標準化しよう。」「限られた範囲でしか調べられていないから、時間的、空間的に範囲を拡大することがこれからの課題である」。これらはある枠組みの中では妥当であり、その通りに事が進むかもしれないが、本当の進歩というのはそんなものではない。それは、誰にも予想できないところから降って沸いたように現れ、ドラスティックな変革をもたらす。人間は予測ができないと不安になり、ともかく何かの見通しを立てて安心したがる生き物だと言った人がある。予測できないと確かに落ち着きは悪いし、OHPフィルムがムダになるのはくやしいが、だからこそおもしろいともいえる。発表方式で、また方法論で次に何が出てくるか。期待しながら見ていることにしよう。

< S >